

大震災から考える

村上市立岩船中学校 3年 工藤 和人

「緊急地震速報です。強い揺れに警戒してください。」

今年の三月十一日、午後二時四十六分。学校の教務室のテレビから警報音が流れました。その五秒ほどたった後、震源地に近いとは言えないここ新潟を、とても強い揺れが襲いました。学校にいた生徒、先生。誰がこんな地震を想像したのでしょうか。生徒の表情は恐怖に青ざめていました。家に帰り、テレビをつけると、映っていたのは宮城県。流される漁船や民家。津波に飲み込まれていく町の姿。

震度七。「阪神淡路大震災」以来の大きな被害。マグニチュードは、日本の観測史上最大でした。死者・行方不明者は、発生した日に出た推定者数を大きく上回り、現在まで、死者は、一万五千人を超えています。

僕は、この震災を通して、「命の重さ」を改めて知りました。僕は、今まで、「命」について深く考えたことはありませんでした。新聞やテレビなどで、誰かが亡くなったというニュースを目にしても、深く悲しむことはなく、見知らぬ他人の死に、何の感情も抱かなかったのです。

しかし、震災後のある日、テレビをつけると、遺品を前にして泣き崩れる家族が映っていました。子どもを失った人がいて、両親を失った子どももいます。命が失われたときの周囲のショックの大きさは、すごいものなんだと感じました。震災から四か月が過ぎた今、ほとんどの人が、復興に向けてがんばっていますが、心の中には、きっと、まだ深い悲しみがあると思います。

現代の日本では、自ら自分の命を絶つ「自殺」が多く、社会問題にもなっています。自殺を選んでしまう人は、必ず何か追い詰められていると思います。いじめを受けたり、大切なものを失ったりしたのかもしれない。しかし、人間の命は、いつか必ず無くなります。もしかしたら、この先の人生で、楽しいことがあるかもしれない命を粗末にするのは、やはり、残念なことだと思いました。

僕は、今回の東日本大震災で、今まであまり気にも留めなかったけれども、実は重要なことを学びました。一つ目は、先ほど言った「命の重さ」です。そして、二つ目は、「全てに感謝する心」です。今回の地震で、僕はとても大きな危機感を覚えました。

「いつ命が無くなるか分からない。多くの人が、今まで持っていた『当たり前』を失った」と。

だから、いつ、どんなタイミングで自分の命が途絶えようと、満足だったと思えるように生きていたいと思います。確かに、人生に後悔はつきものですが、できるだけ、自分の下した決断に後悔しないように生きていたいと思います。その上で、今までほとんど意識してこなかった感謝する心を、身近なことにも持ちたいと思います。自分が今こうして生きていること。普通にご飯が食べられて、普通に眠ることができて、普通に友だちと会話できること。そんな自分たちが当たり前だと思っていることに、しっかりと感謝の気持ちを持つことが、今の時代を生きる私たちには必要だと思います。

三月十一日。あの日以来、日本人に新しい視点が増えた気がします。多くの人が、命を大切にしている気がします。命が「ある」と「ない」のでは、全く違います。命があれば、世界を変えることもできるかもしれません。そのためにも、命を守っていくことが大切だと思います。

僕は、命を何よりも大切に生きていこうと思います。それは、今日という日は、もしかしたら、「もっともっと長い間、生きていたかった」と思った誰かが、笑顔で生きているはずだったかもしれない日だからです。僕は望みます。自分の命を大切に生きていくことができる世界が、これから作られていくことを。

僕は主張します。「命」は何よりも大切だ、と。